

出会い

第11号

発行：大念寺
小矢部市中央町1-34
TEL0766(67)1260

徳本行者（とくほんぎょうじや）

生涯を行脚に捧げた念仏の人

徳本行者は和歌山県日高市で生まれ、江戸後期にかけて活動された浄土宗の僧侶です。

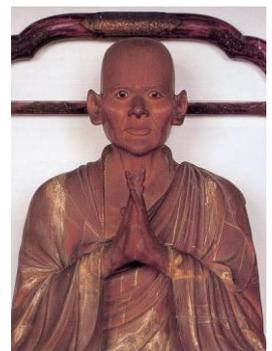
二十七歳で出家、荒行の後、四十歳過ぎてから、念仏を携え、全国を歩いて回る行脚の生き方を選びました。「生き仏」とまで崇められ、晩年には、徳本行者が歩く後に、仰ぎ慕う人たちが続き、「まるで大名行列のよう」と評されたほどだったそうです。



大念寺の名号碑

大念寺にも徳本行者の名号碑が残されています。

丸みを帯びて、終筆が跳ね上がる独特の「徳本文字」で「南無阿弥陀仏」と掘られています。文化十三年八月一日と十五日の二回立ち寄られたと碑に刻まれています。当時の住職は第二十代の寂譽定愚俊諦上人。この年の三月に東京の伝通院（大念寺とご縁の深い寺院・別号で特集します）を出発され、北国全域を行脚されました。現世の苦し



徳本上人木造坐像

みから逃れたいと願う庶民はもとより、諸大名からも崇敬され、江戸・大奥でも帰依する者が多かったそうです。

俳人の小林一茶も徳本を慕った一人で、「徳本の腹を肥やせよ蕎麦の花」と詠んでいます。徳本と一緒に旅した一茶が、徳本の一日の食事が一合の蕎麦であることを知り、驚いて作った句とされています。

徳本行者は布教師である以前に、生き方そのものが念仏の証明でした。清貧・忍耐・無名を貫く姿は、「信心とは何か」を、徳本さんは身をもって示しておられました。その念仏のスタイルは独特で、木魚と鉦を激しく叩くというものだったそうです。全身から発する力強い念仏は、人々を仏道に引き入れるのに十分な魅力があったことでしょう。

御忌法要 奇跡の観音様と ご縁を結びました

法然上人の祥月命日、一月二十五日、御忌法要をお勤めしました。当日は大雪のため参拝者は少なめとなりましたが、静かな中で心に深く残るご法要となりました。

法話は、七尾市宝幢寺副住職・高田光順上人をお迎えしました。高田上人は今回が初めてのご来寺で、スライドを用いながら、能登半島地震での体験を語ってくださいました。現地ですぐに起こったこと、感じたことを直接うかがうことで、報道だけでは分からない「本当の姿」を、より鮮明に知る機会となりました。

いざという時、人は何もできず、「ただ、なるがまま」になるしかないこと。自ら助けを呼ぶことすら忘れていた中、全国から沢山の手が差し伸べられました。仏像の保護作業が繰り返されていた中で、突如として現れた観音様のお話は、住職自身も存在を知らなかったという、ちよつ

とした奇跡のように感じられました。

さらに、その観音様の手を仏師が「ぜひ作らせてほしい」と願って出で来られたご縁から、当日その手を持参いただきました。参拝者の皆さまには、観音様の手を握っていただき、その上から高田上人がそつと手を重ね、「南無阿弥陀仏」とお称えしました。良きご縁が結ばれたことと思います。

復興への道のりは、まだまだ長く厳しいものと思えます。しかし、現実を知り、能登のことを忘れず、気にかけて続けていくことも大切なことです。今回の御忌法要は、その思いを新たにする尊いひとときとなりました。



仏師作の手



出現された観音様

お経解説シリーズ ①

「阿弥陀経」ってどんな内容？

舍利弗よ、舍利弗よ！

阿弥陀経は、月参りの際にお称えする、浄土宗にとって重要な三大経「浄土三部経」の一つになります。三つのお経の中で最も短く、小経（しよきよう）とも呼ばれます。浄土真宗でも同じように大事にされている阿弥陀経は、真宗王国と言われる北陸地区では、最もポピュラーな、誰でも一度は聞いたことのあるお経と言えます。普通に読めば十〜十五分くらいで読み終わりますから、親しみやすいのではないのでしょうか。

「出会い」では、何回かに分けて阿弥陀経について解説してまいります。



阿弥陀経は、お釈迦様が祇園精舎というところで説かれたお経とされています。およそ二千年前、弟子を含めたたくさんの人々の前で話をされています。その中でもお釈迦様の十大弟子の一人で『智慧第一』と言われる舍利弗（しやりほつ）に語り掛けるように説いていきます。『舍利弗』という言葉は、三十六回も登場します。「如是我聞・・・」でお経が始まるのは、そうしたことからです。

阿弥陀経のざっくりとした概説を言うと、阿弥陀仏の極楽浄土のすばらしさと、『南無阿弥陀仏』と称える念仏の功德を説き、さらに東西南北上の六方にいる多くの仏が、この教えは真実であると証明し、安心して念仏に励むよう勧めるといった内容です。

極楽はとにかく絢爛豪華
夢のようなところ

はじめの部分は、西の遠くに行ったところに極楽浄土という国があって、そこでは阿弥陀仏が現に今説法していると言われます。そして、『極楽浄土とはこんなところですよ』というのが細かい描写で描かれています。

お寺の本堂の内陣という部分（ご本尊を安置する最も神聖な場所）は、そんな極楽浄土の様子を表し金銀で装飾されているのです。みなさんの家の仏壇も同じです。最高の技術と財を尽くすことが、最上級の敬意を払うことになるのです。

現代で考える極楽浄土

昔は金銀や宝石の輝きが極楽浄土を象徴して「莊嚴」をつくり出していました。現代では「清潔さ」「調和」「静けさ」「温かさ」といった要素が替わりのイメージになるかもしれません。心を整え、仏様を身近に感じられる環境も、贅沢と言えます。現代に置き換え、思いをめぐらせば、理解しやすくなるのではないのでしょうか。

（次号に続く）

浄土宗の作法 ⑦ 靈膳（れいぜん）

お盆や命日、法事などの特別な日には、「御靈膳（ごれいぜん）」という小さなお膳を用いて、仏様やご先祖様に精進料理をお供えします。これは五つの器と箸が一組になつており、仏壇などに飾って使います。

お供えの基本は、白いご飯に汁物、煮物、和え物、香の物を添えた一汁三菜です。季

節の野菜を使い、彩りよく整えます。

精進料理では、肉・魚・卵などの動物性食品（これを「三厭」といいます）は使いません。これは「生き物の命をむやみに奪わない」という仏教の教えによるものです。だしも鰹節や煮干しではなく、昆布や椎茸を使います。また、ニンニク・ネギ・玉ねぎ・ニラ・らっきょうなど、香りや刺激の強い野菜（「五葷」も、煩惱を強めると考えられるため、精進料理では避けます。



汁碗（しるわん）
味噌汁・吸い物

飯碗（はんわん）
白米

高坏（たかつき）
香の物

壺碗（つぼわん）
和え物

平碗（ひらわん）
煮物

◆◆ 今後の予定 ◆◆

- 別時念仏会（偶数月開催）
三月十四日（土）
夜七時〜八時
場所・大念寺本堂
- おねはん団子作り
三月十八日（水）
午前中
- お彼岸・おねはん
三月二十日（金・祝）
午後一時三〇分〜
場所・大念寺本堂
法話・稲垣一映上人
（砺波市苗加）